

## 第1回かがわの大名庭園俳句コンテスト 入賞・入選作品 〈選評：夏井いつき審査委員長〉

### 【栗林公園部門】

香川県知事賞（最優秀賞） （1作品）

#### 朝がゆや水の秋なる泛花亭

岡山県 彼方 ひらく

茶室・泛花亭（はんかてい）の広々と開け放たれた窓。朝日に輝く紫雲山を背景にした北湖の眺めを楽しみながら、「朝がゆ」を頂いているのです。目の前の清らかに澄み渡る北湖は、今まさに「水の秋」です。「泛花亭」に居る作者自身も、まるで水の秋という季節のなかに泛（う）かんでいるかのような心地なのかもしれません。

優 秀 賞 （3作品）

#### 藩邸の冬木の瘤に問ひたきこと

香川県 酒井 恵子

歴代藩主が修築を重ねてきた栗林公園の藩邸。江戸から明治へ、藩から県へと移り変わる動乱の歴史を、ひっそりと見守ってきた御庭の古木の「瘤」に、作者は何を問うているのでしょうか。葉を落として裸木となった冬木だからこその瘤の存在感が見えるようです。

#### 昼の虫すだく箱松屏風松

神奈川県 花瀬 玲

約1400本の松の内、1000本が手入れ松だという栗林公園。「箱松」と「屏風松」は、自然の美しさと職人の造形美を堪能できる手入れ松です。箱松と屏風松の間の路を歩き、複雑に絡み合う枝ぶりを愛でながら、昼の虫たちが集まって賑やかに鳴く声を聴いています。

#### 木下闇鴨引堀の覗き穴

香川県 谷本 町子

歴代藩主の鴨猟のための鴨場だった群鴨池。鴨場施設はなくなったものの、鴨引堀が復元されています。季語「木下闇」ですから、この「覗き穴」は木の茂る大覗きかもしれません。夏の栗林公園にて、冬場の鴨猟、そして、往時の鴨猟に思いを馳せているのでしょう。

入 選

(10 作品)

和船ゆく偃月橋やうろこ雲

香川県 上野 兆庵

走り根を越す白砂に冬の波

広島県 藤田 みちこ

殿さまの覗きし穴や鴨の陣

香川県 藤澤 カズ子

さるすべり水面に鯉を集めけり

香川県 亀山 京子

栗林の園月を虜に三百年

愛媛県 石原 宏子

待ちわびた双頭蓮が顔をだす

徳島県 葛籠 裕美

秋声や源氏車の鬼瓦

高知県 岩崎 哲也

梅林や白無垢胸の剣は赤

香川県 小池 和美

飛び石のすべてに乗ってゆく小鳥

愛媛県 宇都宮 房枝

舟頭の竿におどろく夏茜

香川県 白山 元子

## 【中津万象園部門】

丸亀市長賞（最優秀賞）

（1 作品）

秋思あづけん萬象園の白石に

愛媛県 越智 空子

中津万象園の「石投げ地蔵尊」でしょう。大名庭園であったころは、容易にお参りできず、漁師、農民、商人などが小石に願い事を書いて園外から投げていたことからの名だとか。地蔵尊の前に立ち、自身の秋思を預けてしまいたい思いにかられているのでしょう。下五「白石に」という余韻が、「秋思」を更に深くします。

優 秀 賞

（3 作品）

まくなぎをくぐれば水門の淡海かな

愛媛県 久保 晴美

中津万象園は、丸亀二代目藩主京極高豊侯が先祖の地・近江八景を模して造営した庭園。琵琶湖を懐かしむ思いに寄り添う心が、「水門の淡海かな」という詠嘆として表現されているのでしょう。「まくなぎをくぐれば」という現在の向こうに、悠久の歴史が香ります。

四阿の梁に手斧の跡秋暑

大分県 檜の木

八景池の島に建つ四阿（あずまや）でしょうか。その梁を見上げると、木肌を均した手斧（ちょうな）の跡が目にとまりました。手斧仕上げの特徴でもある鱗のように並んだきれいな「跡」。古き時代の風情を味わわせようとした大工職人の心意気でしょうか。折しも暑さの残る頃です。

観潮楼の柱に汗の背を預く

兵庫県 竹田 むべ

池の島々を渡りつつ、美しい庭園の眺めを楽しみ汗ばんできたのでしょう。眼前にある「観潮楼」は現存している煎茶席では最古の茶室。かつて風流人たちは、あの観潮楼の柱に汗の背を預けていたのでしょう。そんな歴史に思いを馳せつつ、潮の音に耳を傾けます。

入 選

(10 作品)

蜻蛉の傘に逃げ込む万象園

愛媛県 蓼虫

扁額の象の字歩きだす秋暑

東京都 露草 うづら

巨大なる団扇が光はなちけり

香川県 細川 鮪目

陽炎か邀月橋をかけ登り

香川県 西山 一雄

邀月橋すこし揺らして水温む

香川県 西谷 寛風

約束の邀月橋を風爽か

愛媛県 山澤 香奈

松の根の重なり合ひて深む秋

大阪府 宇都宮 駿介

園に入らば山茶花より頭を低うせよ

愛媛県 高尾 里甫

あらたまを永遠に踏まるる石でいる

愛媛県 穂積 天玲

海よりの初風触れよ丹の橋に

愛媛県 CRUZ